2026.2.19
◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇
地域日本語支援ニュース　こだま　第 464 号
ともに生きる
～地域で、日本で、そして世界で～
◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇■◇◆◇■◇■◇
★―― メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます。――★
【地域日本語支援ニュース　「こだま」】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会（AJALT）発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。
★――　皆様からのご意見、ご感想をお待ちしています。――★
編集部：https://www.ajalt.org/local/soudan/contact.htm

■ともに生きる：世界のどこからでも■

日本からシリアへ、そして世界へ希望と平和を届けたい

シリアンハンズ
渡　里香（わたり　りか）

2011 年の「アラブの春」以降、シリアの状況は急激に悪化し、多くの国民が避難民（ひなんみん）となり国を後にしたことは、新聞・テレビ報道などで皆様の記憶にあることでしょう。その後 14 年を経た 2024 年末にアサド政権が崩壊（ほうかい）し、事態（じたい）は急速に展開しましたが、私たちがニュース等でシリアの現状を知ることは、ほとんどなくなってしまいました。そんな中で、日本在住のシリア人と日本人が協働して活動している「シリアンハンズ」は、シリアだけでなく、世界に目を向けた支援を続け、他団体との連携の輪も広がっています。2015 年からこの活動にボランティアとして参加している渡里香さんに、同団体の活動についてご紹介いただききました。

◆ わたしが活動を始めたきっかけ

私は 2015 年の秋頃から、「シリアンハンズ」のボランティアのお手伝いをスタートし、今に至っています。きっかけは、職場の大学の国際交流イベントでシリアからの留学生と知り合い、東京ジャーミィというモスクのバザーにお客として見学に行った時のことでした。友人のシリア人と「シリアンハンズ」のリーダー、フサーム・ザイナーさんが畳一畳（たたみいちじょう）

ほどもない床のスペースで膝（ひざ）をついて、香油（こうゆ)、せっけん、シリアの伝統的なハーブや小物を売っておられたのですが、当時、友人は博士課程の学生でした。日本語で「ありがとうございます」と繰り返し、おじぎをしながら商品を売っている二人の姿を見て、私はある意味非常にショックを受けて、当日持っていたお金のほとんど（1 万円位）で売っていた品物を購入（こうにゅう）し、「何か手伝えることはないか」と彼らに申し出て、「シリアンハンズ」との関わりをスタートしました。

◆「アラブの春」とシリア

　アラブ世界では、革命はしばしば「春」や「花」といった言葉で表現されます。「アラブの春」とは、2010 年から 2011 年にかけてアラブ世界を席巻（せっけん）した民主化運動の波を指す総称です。「アラブの春」はチュニジアとエジプトで始まり、その後シリアに波及（はきゅう）しました。シリアでは、中学生たちが壁に政権を非難するメッセージを落書きしたところ、捕らえられ拷問（ごうもん）を受けたのです。これが全国的な民主化運動の引き金となりました。当初平和的だったデモは、政権が暴力的な弾圧（だんあつ）に訴（うった）えたことでエスカレートし、次第に激化していきました。化学兵器の使用、包囲による飢餓（きが）状態への追い込みによる大量殺戮（さつりく）が行われ、国外脱出が可能なシリア人たちは世界各地へ逃亡を始めました。当時、日本在住のエンジニア研究者フサーム・ザイナーさん（シリアンハンズリーダーで設立者の一人）は 2009 年に奥さんやお子さんを日本へ呼び寄せました。そして少しでもシリア人を助けたいという強い思いから、2012 年にシリア孤児（こじ）支援プロジェクト「カファラ」を設立。その後プロジェクトは拡大し、2014 年に「シリアンハンズ」が設立されました。次第に日本在住の多くのシリア人がチームに加わっていきました。当初は町田市の地元バザーで、繊細（せんさい）でとてもおいしいシリアの焼き菓子、アレッポせっけん、アラビアの香油といった小物を根気強く販売していました。私は町田市のバザーで、シリアやその他アラブの人々と交流を深めながら、関東各地で行われるバザーやイベントの準備や販売を手伝いました。バザーの売上は 1 回あたり 1 万円から 10 万円以上とさまざまでした。シリアでは 150 円で孤児の 1 日分の生活費が、300 円で教育費（教材や環境作り）が賄（まかな）えます。日本ではわずかな金額でも、シリアの孤児たち、難民たちにとっては、それは大きな希望につながりました。そして日本との絆（きずな）そのものが希望の源泉となり、日本とシリアの架（か）け橋は、どんどん太く強くなっていったのです。

◆何度再建しても空爆される病院や学校―それでも「シリアンハンズ」の支援は続く

民主化運動の最中、何百万人もの避難民となったシリアの人々は、家も土地も奪（うば）われ、テント暮らしとなり、攻撃（こうげき）によって親や家族を失って子どもたちは孤児になってしまい、その数はどんどん増えていきました。シリアの冬は大雪になります。アラブというと砂漠（さばく）のイメージがありますが、シリアには四季があり、冬は東北や北海道くらい雪に覆（おお）われます。テント暮らしでの大雪は命を失うかもしれないのです。「シリアンハンズ」は毎年冬季キャンペーンとして、薪（たきぎ）やオイル、毛布、生活必需（ひつじゅ）品の配布なども行っています。生存に関わる最低限のサポートをしていますが、まだまだ足りていません。本来就学（しゅうがく）期の孤児たちは学習の機会も奪われているので、教材や教師の確保など現地の NPO と協力し、学校再建のためにもできることは少しでも続けています。シリアでは 200 万円ほどで学校を建てることができます。一時は奔走（ほんそう）して 120 万円ほど集めて修復再建した学校が再び空爆されたりもしました。2017 年当時は、500 名以上の孤児を支援してきましたが、コロナもありバザーもできなくなってからは、オンラインショップをスタートさせ、現在は 200 名ほどの孤児支援を継続（けいぞく）中です。ガザやパレスチナも支援しており、世界でもっとも弱く困っている地域には可能な限りの支援を続けています。2023 年のトルコ・シリア地震の時も日本国内の個人の方々に呼びかけ、心ある病院からも支援してもらえました。

◆東洋大に大学公認の学生ボランティアグループ「シリア班」誕生（たんじょう）！

「シリアを忘れないでほしい」とシリアの子供たちや難民化した人々は常に願っています。その中で「シリアンハンズ」と大塚モスクが共催し、東洋大学国際学専攻の子島進（ねじますすむ）教授の指導のもと開催されたイベントが、学生さんの意欲を引き起こし、大学公認のボランティア団体「シリア班」を誕生させてくれました。現在「シリア班」は、手作りアクセサリーのワークショップ定期開催（かいさい）、バザーでの自分たちの手作りアクセサリー販売をはじめ、シリアの品々の販売支援、イベントへの参加協力、会議への参加などなど活発に活動しています。レギュラーメンバーは 10 名ほどで、ほかにも呼応した学生さんたちがイベントごとに参加協力してくださり、大きな力に成長してきています。

◆つらくとも明るい希望の道を愛情に満ちた世界の方々と共に！

　そして「シリアンハンズ」は、単にシリア支援だけでなく、世界の国々との異文化交流や平和構築も行っています。パキスタン、マレーシア、エジプトなどイスラム諸国はもちろん、2025 年のクリスマスには、FWEAP（Foundation for the Welfare and Education of the Asian People：公益財団法人アジア福祉教育財団）を通じて知り合った「NPO 法人 日本ウクライナ友好協会 KRAIANY」の皆さんとウクライナカフェ クラヤヌィ【https://www.kraiany.org/ja/cafe-kraiany】にて共同バザーも開催（かいさい）することができました。一人ひとりの力は小さくても、目指す方向が同じで、それがつらくとも明るい希望の道で愛情に満ちた人々と共にあれば、どんな国の人々とも手を組んで同じ志（こころざし）を持って平和な未来に進むことができると私たちは確信しています。
　読者の皆さんも、もし支援のお気持ちがあれば、合同バザー開催なども可能ですので、いつでもご連絡をください。シリアだけでなく、世界のために少しでも共に進みたいと「シリアンハンズ」は常に願っています。

◆最新状況やイベント情報は、以下から取得できます。
https://www.syrianhands.jp/
https://www.facebook.com/syria.hands/
https://www.instagram.com/syrian_hands/
https://x.com/syrian_hands
https://www.youtube.com/channel/UCHM0xaEWBOlNS-EwHl3cJVQ/videos?view=0&sort=p

※フォローや拡散もまた支援につながります。
　どうぞよろしくお願いいたします。
シリアンハンズ